

学内広報

for communication across the UT



特集：

■UTフォーラム in ソウル

■新役員の紹介



2007.7.25

No. 1362

特集

UTフォーラム in ソウル

6月25日(月)・26日(火)の両日、第6回UTフォーラムが開催されました。今回の開催地は韓国・ソウル。ここでは、ソウル大学校と高麗大学校においてそれぞれ開催されたフォーラムの様子をご紹介します！



UTフォーラムとは？

東京大学は、国外の著名な大学・研究機関において、本学の優れた研究成果を発表するとともに、相手方大学等との研究交流を通じて本学の国際的プレゼンスを高めることを目的に、平成12年(2000年)より、UTフォーラム(University of Tokyo Forum)を開催してきており、今回のソウルにおけるフォーラムで第6回目を迎える。

第1回は、平成12年(2000年)1月24日に、米国のマサチューセッツ工科大学において、理学・工学分野のフォーラムを開催した。第2回は、同年12月14日～15日に、米国のスタンフォード大学において、生命科学・生物医学分野のフォーラムを開催した。第3回は、平成14年(2002年)11月27日～28日に、シンガポールのシンガポール国立大学において、人文科学・社会科学・自然科学の全分野に渡るフォーラムを開催した。第4回は、スウェーデンのカロリンスカ研究所、ウプサラ大学、ストックホルム大学、ストックホルム商科大学の4会場において、医学・生命科学系、基礎

科学系、環境学系、経済・経営系分野のフォーラムを開催した。この回より、複数の大学・研究機関にて同時にフォーラムを開催するスタイルが導入された。また、教員フォーラムと並行して、東京大学と開催大学・研究機関の学生同士が、将来にわたる研究者交流の基礎を築くなどを目的として、企画から会議運営までを協力して行う学生フォーラムを開催することとなったのもこの回であり、そのスタイルは、第6回の現在まで継承されている。第5回は、平成17年(2005年)4月28日～29日に、中国の北京大学、清華大学、中国科学院にて、中国学系、材料学系、医学系分野のフォーラムを開催した。この時に同時開催される予定であった学生フォーラムは、当時の中国情勢により延期され、平成18年(2006年)の8月及び9月に改めて、東京大学において開催された。

そして、第6回として、平成19年(2007年)6月25日～26日に、韓国のソウル大学校及び高麗大学校において、人文学系、電気・工学系、教育学系分野のフォーラムが開催された。

UT Forum 2007 in Seoul プログラム(1日目)

6月
25日
(月)

会 場		
高麗大学校	ソウル大学校第1会場	ソウル大学校第2会場
<p>学生 フォーラム (教育学系)</p>	<p>【人文学系】 UT-SNU Forum: "Future Directions in the Humanities"</p> <p>◆時間：9：00～16：25 ◆場所：ソウル大学校Hoam Faculty House Convention Center</p> <p>◆東大側：小宮山宏(総長)、吉田光男、六反田豊、安藤宏、一ノ瀬正樹、柴宣弘、羽田正、渡辺浩、柴田元幸、権寧環 ◆ソウル大学校側：李泰鎮(人文大学長)、朴性昌、李恩廷、安秉稷、琴章泰、金度均、宋虎根(対外協力本部長)</p>	<p>【電気・工学系】 UT-SNU Forum: "Electrical Engineering and Electronics for Quality Life and Society"</p> <p>◆時間：9：00～16：30 ◆場所：ソウル大学校 Building 39 B-103 Conference room</p> <p>◆東大側：小宮山宏(総長)、保立和夫、横山明彦、荒川泰彦、柴田直、坂井修一、堀洋一 ◆ソウル大学校側：LEE, Jang-Moo(President), KIM, Doh-Yeon, SUL, Seung-Ki, MOON, Seung-il, LEE, ByoungHo, SHIN, Heonshik, SHIN, Yeong Gil, PARK, Namkyoo, PARK, Jong-Keun</p>
<p>UTフォーラム 全体レセプション (19：00～) @ソウル プラザホテル</p>		



UT Forum 2007 in Seoul プログラム (2日目)

会場

高麗大学校

ソウル大学校第1会場

ソウル大学校第2会場

【教育学系】 UT-KU Forum:
"University Education
in the midst of Globalization"

◆時間：10:00～18:30
◆場所：高麗大学校 メモリアルホール

◆東大側：小宮山宏（総長）、浅島誠（理事・副学長）、金子元久、小林雅之、高橋和久、木畑洋一、佐藤健二

◆高麗大学校側：沈光淑（副総長）、全亨式、崔官、韓龍震、尹在敏、高炳憲、禹濟昌、李南昊

学生フォーラム
(人文学系)

学生フォーラム
(電気・工学系)

6月
26日
(火)



【人文学系】 UT-SNU Forum:
“Future Directions in the Humanities”

人文学系フォーラムは「人文学の可能性—その方法と実践」と題して、東京大学教員の発表に対してソウル大学教員がコメントをつけ、会場との間で議論するというかたちで進められた。東京大学ないし日本の研究者たちが、西洋から入ってきた近代科学としての人文学をどのように構築し、新たな方向を模索しているかをめぐって、文学・歴史学・思想の3分野から、自らの研究経験をもとにした報告が行われた。近代のとらえ方、人文学の危機という日韓共通の問題とその克服などをめぐって、発表者・コメンテーター・会場参加者の間で熱心な討議が行われた。多くの共通点と相違点が発見され、さらなる研究交流と協力の必要なことが確認された。



【人文学系】 学生フォーラム
(ソウル大学校)

6月26日(火)、ソウル大学冠嶽キャンパス7号棟3階小会議室において東京大学及びソウル大学の学生計24名が参加し、UT/SNU学生フォーラム(「認識枠としての東アジア」)が開催された。フォーラムは東京大学側から3名が報告し、ソウル大学側から代表コメントを受け、その後全体質疑を行う形で進められた。(フォーラムでは活発な意見交換がなされた。フォーラム終了後には、昼食会を開き、その後ソウル大学博物館を見学するなど親睦を深めた。)

参加学生
の感想

田端 尚徳
大学院人文社会系研究科韓国朝鮮文化研究専攻 M3

今回のフォーラムでは、ややもすれば自明なものとして使用されがちな「東アジア」という概念の自明性を問う、そして互いの認識の相違を確認する、ということに関心の主眼においた。フォーラムでは、予想以上に活発な議論がなされ、東京大側、ソウル大側双方とも得るものがあった。ともすれば批判の応酬になりうるようなセンシティブなテーマ設定にもかかわらず、双方が共通の土台の上で議論し、「東アジア」という概念の有効性と限界を相互に認識しあえたことが、今回のフォーラムの有意義さを物語る。これはひとえに東京大学側からの報告発表を引き受けてくれた3名とその報告を真剣に検討してくれたソウル大の学生たちの努力によるものである。なお、フォーラム後のレクリエーション及び懇親会において参加者個々人同士の懇親も深まったことを付言する。これもフォーラム自体が双方にとって有意義であったために他ならない。



【電気・工学系】 UT-SNU Forum:
“Electrical Engineering and Electronics
for Quality Life and Society”

安全で安心して暮らせる質の高い21世紀社会を実現する「セキュアライフエレクトロニクス」のコンセプトをテーマに、工学系(電気系)フォーラムが2007年6月25日(月)に、ソウル国立大学校工学部ホールで150名以上の参加者を得て開催された。小宮山宏総長とLee, Jang-Mooソウル国立大学校学長の挨拶のあと、保立和夫工学系副研究科長が本学の電気系グローバルCOEプログラムの紹介を行い、社会と生活を監視する「センサ・センシング技術」、そのデータを伝送処理・判断する「情報伝送・処理技術」、その判断を生活と社会にフィードバックする「エネルギー・環境・アクチュエーション技術」、さらにこれら各要素、技術機能向上のための「デバイス・マテリアル技術」について本学6名、ソウル国立大学校6名の教員が講演を行った。このエレクトロニクス分野では、わが国と韓国は熾烈な競争を繰り広げており、その研究・教育においてトップクラスの両校が、今後の革新的な要素技術、システム技術の創出に向けて幅広い議論を行うことができたことは、大いに有益であった。



【電気・工学系】 学生フォーラム
(ソウル大学校)

2007年5月26日ソウル大学においてUniversity of Tokyo Student Forum 2007が開催された。当日はポスターセッション・オーラルセッション・サッカー親善試合・懇親会と盛りだくさんなスケジュールを一日で行った。

参加学生
の感想

河島 清貴
大学院工学系研究科電気系 D2

オーラルセッションでは東京大学16件、ソウル大学15件の発表があり電気・情報・電子系の3つのグループに分かれて発表を行った。結局予定時間を合わせて一時間近くオーバーしてしましたが、少人数で行ったため非常に密度の濃い議論をすることができた。サッカー親善試合の結果は0-0の引き分けだった。お互い負けず嫌いで、大変盛り上がったのと同時に、よいプレーごとに両チームから拍手が起こる非常に和やかな雰囲気もあった。スポーツは言葉を超えろということを実感することができた。夜の懇親会も予想より多くの学生が参加し、韓国料理やそれぞれの国の文化を話題に、交流することができた。(今回Student Forumを実行するに当たり、ご指導頂いた電気系の横山明彦教授や堀洋一教授、それに予算や航空券・ホテルの手配を一手に行ってくださった国際課の皆様には大変お世話になりました。またソウル大学側でForum運営に奔走してくださった学生幹事団それにご指導頂いたPark, Jong-Keun教授に心より御礼申し上げます。)





【教育学系】 UT-KU Forum: "University Education in the midst of Globalization"

教育フォーラムは、「グローバル化の中の大学教育」をテーマに、2007年6月26日（火）に高麗大学校百年記念館で開催された。小宮山宏総長と韓昇洲高麗大学校総長の挨拶の後、フォーラムの統一テーマのもとに、〈グローバル化の中の大学〉、〈人文社会科学の未来〉、〈大学教育の展望〉の3つのサブセッションを設けて、9つの発表を行い、最後に総括的なパネルディスカッションを行った。大学教育のグローバル化は、留学生・教員の交流・移動、教育内容、教育方法など多様な側面にわたっており、グローバル化の中の大学教育の再構築は、国際的に共通の課題である。特に、教授言語、教育方法、人文社会科学や教養教育のあり方について、多くの共通の課題が提起された。同じような状況におかれた日本と韓国の大学が、共通の問題を相互に検討し、意見を交換したことは多大な意義を有していると言える。また、グローバル化を単に大学教育の危機と捉えるのではなく、積極的なチャンスと考えるべきか否かとのグローバル化に対する大学教育の方向性という根本的な問題をめぐっても議論がなされた。



【教育学系】 学生フォーラム (高麗大学校)

2007年6月25日（月）、ソウルの高麗大学校のメモリアルホールにてUT-KU学生フォーラムが開催された。東京大学から11人、高麗大学校から12名の学生が参加したこのフォーラムでは、「大学生から見た大学教育」というテーマで、入試の問題や教養教育と専門教育の関連性や大学教育の質など様々な面から議論が行われた。

参加学生 の感想

金愛花
大学院教育学研究科比較教育社会学コース
D2

◆苦労したこと：

- ①学生募集において、後半キャンセルの人数が多くなっていたので、再募集に結構力を入れなければならなかった。
- ②韓国側の学生リーダーたちの連絡（メールによるもの）が非常に大事だったのであるが、途中メールのトラブルが続き、かなり困っていた。

◆得たもの：

- ①フォーラムの企画から実施まで、一つ一つ自分で考えることによって、非常に良い体験になりました。
- ②学部/研究科を超えた学生たちの交流ができ、ネットワークを広げることができた。参加者の皆さんもこの点について非常に喜んでいました。

小宮山総長が高麗大学学長および、 ソウル大学学長と会談しました！

UTフォーラム2日目の6月26日、国際交流の一環として、小宮山総長は、Han,Sung-Joo高麗大学校総長および、LEE,Jang-Mooソウル大学校総長と、それぞれ会談されました。

小宮山総長・高麗大学校総長会談においては「英語教育の重要性」、「両国の大学入試制度の違い」、「大学基金の大切さ」等について対話がなされ、小宮山総長・ソウル大学校総長会談においては「グローバル化時代における両大学の役割」、「学部・学科の壁を取り除いていくための方策」等について、対話がなされていました。両会談の内容については、淡青20号（10月発行予定）誌上にて掲載されますので、ぜひ、ご一読ください。

【本部広報グループ】



小宮山総長と
高麗大学校総長
の会談風景



小宮山総長と
ソウル大学校総長
の会談風景



平成19年7月6日付で上杉理事が退任され、辰野理事、杉山副理事が着任されました。以下のとおり、紹介します。

新役員の紹介



理事
辰野 裕一

(担当) 人事労務 事務組織 業務改善 法務・倫理
男女共同参画

(任期) 平成19年7月6日～平成20年3月31日

昭和53年 東京大学法学部 卒業
昭和53年 文部省入省 初等中等教育局
平成10年 広島県教育委員会教育長
平成13年 文部科学省初等中等教育局
初等中等教育企画課長
平成16年 文化庁文化財部長
平成17年 文化庁長官官房審議官
平成18年 文部科学省大臣官房審議官 (高等教育局担当)



副理事(非常勤)
杉山 健一

(担当) 渉外

(任期) 平成19年7月6日～平成20年3月31日

昭和46年 東京大学大学院修士課程
(工学部化学工学科) 修了
昭和46年 東亜燃料工業株式会社
(現・東燃ゼネラル石油株式会社) 入社
平成8年 同社 取締役
平成12年 同社 常務取締役 川崎工場長
平成14年 同社 代表取締役 常務取締役 川崎工場長
平成18年 同社 退社

役員退任・就任の挨拶

このたび退任された上杉理事、および、就任された辰野理事、杉山副理事の挨拶を以下のとおり、掲載します。

東京大学退任のご挨拶

(前・本学理事) 独立行政法人日本スポーツ振興センター理事 上杉 道世

平成15年8月1日に着任以来、約4年の勤務を経て、7月5日に退任しました。この間、最初の8ヶ月は事務局長として、平成16年4月の法人化以後は人事労務及び事務組織担当の理事として、佐々木総長及び小宮山総長の下で勤務してきました。法人化の準備と移行、そして法人としての東京大学のさまざまな新しい仕組みづくりに努力してきました。日本の高等教育の歴史の中でも大きな節目となる時期に、その焦点とも言える東京大学で仕事をさせていただいたことは、長年教育行政に携わってきた私にとってもありがたいことでした。特に事務職員、事務組織のあり方については、多くの問題を抱えており、今後の東京大学の発展のためにも、根本的な改善が必要だと考えました。私は多くの方々との対話を通して、「事務職員等の人事・組織・業務の改善プラン」を作成し、取り組みを進めてきました。初めて経験する試みも多く、戸惑いを感じた方もいたかもしれませんが、幸い変化への動きは確実に始まっています。困難な時にこそ、打って出ることが大事です。近い将来、世界の知の頂点にふさわしい大学経営と教育研究支援の高い力量を持った職員が登場することを確信しています。お世話になったすべての方々にお礼申し上げますとともに、東京大学の教職員の皆さん、特に若い職員の皆さんの今後のご活躍を祈っています。

理事着任にあたって

理事 辰野 裕一

このたび、上杉理事の後任として着任いたしました。平成16年の法人化以来4年目をむかえ、さまざまな課題と可能性に満ちた高等教育の現場の中で、皆様方とともに知恵を出し、微力を尽くしてまいりたいと存じます。

35年前に北海道から上京し、駒場寮、学部に来てからは正門前の学寮で学生生活を送った私にとって、本学はことさらに親しく身近な存在で、個人的には「ご恩返し」でもあります。なじみの店やなつかしい風景に再会するにつれ、日々その思いを強くしています。赤門から本郷三丁目駅までの間はずいぶん変わった印象ですが、それでも昔のたたずまいが案外に残っているようです。

私の担当は、人を活かし、組織の活力を最大限に引き出すことにあります。このことにより、わが国の「知の拠点」としての東京大学の有する有形、無形の財産や潜在力を十全に発揮し、新しい時代においてさらにその真価を高め、国際的に雄飛していくための一助となれば、と思っています。

「鼓腹撃壤（こぶくげきじょう）」という言葉があります。理想の政治が行なわれていたとされる中国古代の「堯（ぎょう）帝」の世において、ひとびとは毎日腹鼓を打ち大地を叩いて歌い、その太平をもたらしているのが優れた統治によるものだと意識することすらなかったといいます。行政の要諦はこれに尽きると先輩から教わったことが今でも心に残っています。こんなことも思いながら、現場に答えを求めつつ、着実に前へ進めていきたいと思っておりますので、よろしくお願いたします。

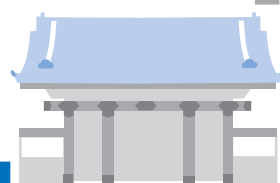
東大基金の業務開始にあたって

副理事 杉山 健一

7月1日より、渉外本部でお世話になっております杉山健一です。36年ぶりの本郷キャンパス、その景観の変わり様に驚いています。学生時代は工学部5号館（化学工学科）と二食（運動会総務部）が構内での生活の場でした。専ら運動会総務の業務に熱中し、楽しく想い出多い学生生活を送りました。七帝戦、保健体育寮の夏季開寮、陸上大運動会、ゴルフ教室、スキー教室、サッカー大会などなど。学部卒業の年の1月、安田講堂の攻防があり、入学試験は中止、卒業は5月31日でした。2年後の3月末、大学院を卒業し、石油精製専門の会社に就職、技術畑や製造畑で仕事をしてきました。退職前の9年間は石油精製工場の工場長として、プラント運転組織の運営に携わり、昨年4月、35年間の会社生活を終えました。この度、縁あって、世界の知の頂点を目指す母校で、新しい仕事に就くことになりました。皆さま、どうぞ東大基金とりわけUT130の目標達成にご支援ご協力をお願いいたします。

NEWS

部局 ニュース



一般ニュース



知のプロムナード小委員会

知のプロムナードデザインコンペ
入選作品決まる！
—たかが<ベンチ>、されど<ベンチ>—



学内広報No.1355でお知らせしました「知のプロムナード デザインコンペ」において、71件の応募の中から厳正なる審査の結果、入選作10点が決定しましたので以下のとおり入選作の応募者10名を発表いたします。

なお、入選作の応募者には知のプロムナード小委員会より個別にご連絡させていただきます。

皆様からの多数のご応募ありがとうございました。

大野友資さん	前川 哲さん
渡辺一生さん	筑紫一夫さん
森田悠詩さん	遠藤暢雄さん
佃 和憲さん	日高 仁さん
松本文夫さん	八木敦司さん

知のプロムナードホームページ

<http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/130prome.html>

医科学研究所

創立130周年記念事業
International Student Forum2007
開催される

6月25日（月）から6月27日（水）の3日間、代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて、International Student Forum 2007 が開催された。このフォーラムは、2005年4月に行われたUTフォーラムの学生フォーラム部分を同年9月に東京（医科学研究所）で開催したところ大変好評であったため、以後本学医科学研究所と中国科学院研究生院との交互開催で継続することとなった事業で、今回が第3回目になる。本学からは、大学院生13名が、中国科学院研究生院からは大学院生14名が参加した。また、今回は、University of Nebraska Medical Center (UNMC) 及びUniversity of California, San Francisco (UCSF) からの大学院生各10名を特別招待しての総勢47名での開催となった。



フォーラム風景

フォーラム初日は清木医科学研究所長の挨拶でオープニングを飾り、生命科学、基礎医学、生物学の領域を専攻する大学院生が各自の研究成果を2日間に渡って発表した。このフォーラムでは、企画の段階から各機関の学生代表が関与し、プログラムの立案から運営まで教職員の指導のもと、学生が主体となって取り組んだ。各セッションの座長に学生が輪番制であたるなど、まさに学生による学生のためのフォーラムであった。最終日に開催されたレセプションでは、浅島理事（副学長）、古田総長室顧問、馬研究生院副院長、Leuenerger UNMC副学長等が出席し、参加学生等の大合唱が催されるなど、大盛会のうちに幕を閉じた。



浅島理事（副学長）と馬副院長とのフラッグ交換



参加者による集合写真

大学院理学系研究科・理学部
留学生見学旅行開催される
部局

7月7日（土）・8日（日）、今年の理学部の見学旅行は軽井沢。嬬恋村役場と浅間山ミュージアムの協力を得て「火山学習会」をメインに行った。



嬬恋郷土資料館の前で荒牧先生、嬬恋村の方たち

講師に本学名誉教授の荒牧重雄先生をお迎えすることができた。半世紀にわたり浅間山の研究に取り組み、今なお地域の防災教育に奔走し、「走る火山学者」としてマスコミにも紹介されているとおり、先生のパワフルでフットワークの軽い行動力には参加者一同脱帽の思いだった。村役場の用意してくださったマイクロバスで白糸の滝・浅間火山観測所（本学地震研究所附置）・鎌原村落・嬬恋村立郷土資料館などを巡りながらの学習会には参加留学生達も大変興味を持ったようであった。天明噴火の災害跡を見学した学生は自然の恐ろしさを痛感していた。「災害を最小限度に食い止めるために火山をよく知る」ことの必要性を自治体の首長を通して訴えている先生の活動がよく理解できるプログラムであった。



本学浅間火山観測所横の地層で噴火の歴史を学ぶ

一日目は中軽井沢の野鳥の森をピッキオ（ワイルドライフリサーチセンター）スタッフの方のガイドで「ネイチャーウォキング」を楽しみ、東京からの移動の疲れと程よく歩きつかれた体を温泉で癒すこともできた。ガイドを引き受けてくださった南さんは動物の研究で本学の教員と共同で論文を書かれているとのこと。今回の旅行では本学にゆかりの深い方々に応援され、大変有意義な時間を過ごすことができた。

毎年国から支給される見学旅費に感謝しながら、留学生は今年も充実した2日間のフィールドトリップを満喫することができた。



七夕飾りに留学生達も願い事を吊るす

大学発ベンチャーの一大拠点、「東京大学アントレプレナープラザ」がついに開業！

アントレプレナープラザの全容がみえた！

本年6月、本学の研究成果や教育成果を活用するベンチャー企業を効果的に支援するための受け皿となる施設が、春日門の側、産学連携プラザの隣接地にオープンしました。7階建ての建物で2階以上の居室が専有可能です。全30室（1室約58㎡）のうち、2、3階はオフィス利用、4階～7階はウェットラボも含めた実験室としての利用が可能です。

【右：施設全景】



【上：居室内の様子
（プロメテック・ソフトウェアのみなさん）】

【右：ブレイクエリア】



ベンチャー企業の入居がスタートしました

7月11日（水）現在、支援企業として承認された企業のうち、賃貸借契約の締結が完了した企業は以下の7社です。順次入居が進み、アントレプレナープラザでの活動をスタートさせています。

株式会社ネクスト21
株式会社アイプラスプラス
アドバンスト・ソフトマテリアルズ株式会社
プロメテック・ソフトウェア株式会社
株式会社ユーグレナ
株式会社セルクロス
株式会社バイオマスター
（契約締結順）

支援企業募集中です！

産学連携本部では、引き続きアントレプレナープラザにおける支援企業を募集しています。本学の研究成果や教育成果を活用したベンチャー企業を積極的に支援してまいりますので、ご関心のある方はぜひお問い合わせください。「とりえず実際に施設を見てみたい」というご要望にも対応させていただきます。

【事業化支援開始までのプロセス】

まずは、産学連携本部までご連絡ください。
支援スキームの全体像や、支援対象（資格）等について
ご説明させていただきます。

↓
申請要件に該当し、産学連携本部からの支援を希望する場合、
「事業化支援申請書」をご提出いただけます。
（作成方法や記載内容につきましては、随時ご相談に応じます）

↓
審査委員会を開催いたします。
10～15分のプレゼンテーションをお願いいたします。

↓
（貸室内でバイオサイエンス系の実験を行う場合、別途
産学連携本部に設置される「東京大学アントレプレナープラザ・
バイオサイエンス委員会」での承認が必要になります）

↓
産学連携本部の承認後、
東京大学と事業化支援等に関する覚書、
施設オーナーである株式会社成信と賃貸借契約を
締結していただきます。

↓
アントレプレナープラザへの入居および事業化支援が
スタートします。

産学連携プラザインキュベーションルームの 入居者募集を再開します(予告)

産学連携本部では、2004年の10月から起業支援オフィスとして、産学連携プラザ内でインキュベーションルームを運営しています。これは創業間もない企業や起業を目指す個人の支援を目的として、約50㎡のオフィススペースを原則1年間に限り、月額3,000円（共益費込み）/㎡の安価で提供するものです。

アントレプレナープラザの開業による支援企業の退去にともないまして、今秋以降、入居者を再度募集する予定です。詳細が決まり次第、別途ご案内させていただきます。

アントレプレナープラザ、インキュベーションルームに関するお問い合わせは、下記へお願いいたします。

産学連携本部事業化推進部
特任准教授 白石敬仁（内線22358）
産学連携グループ 総務チーム（内線21489）
eplaza@ducr.u-tokyo.ac.jp

連絡先：産学連携本部（産学連携グループ）
電話：内線22857（外線03-5841-2857）
ホームページ：<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>
※「東京大学トップページ」上で「産学連携本部」をクリック



そろそろ、基金の連載も定番(?)となってきましたのでしょうか。シリーズの第4回は、基金の前々担当理事であり、今も基金の良きアドバイザーとしてご指導いただいております西尾理事に、基金への熱い想いを語っていただきました。

東大基金への想い

西尾 茂文
理事 (副学長)

平成17年度に池上元理事の後を受けて、東大基金活動を担当しておりました者として、基金構築活動と基金運用益活用への想いを綴らせていただきます。

基金構築活動の重点は、東京大学の教育研究活動について広く社会と対話し、理解を得ることだと思います。すなわち、基金活動の第一の意味は、教育研究活動に関して社会の理解を得ることであり、寄附はその結果であると思っています。「法人化」とは、『「保障」(自治を保障されているという受動的規定)から「保証」(自治の保障を前提として社会における使命達成を保証する積極的規定)への転換』と考えています。基金構築活動は、まさに東京大学が保証する教育研究内容について社会と対話する啓行活動の一つであると考えています。

また、運営費の交付を受けている本学が基金運用益を活用する意味については以下のように考えています。

東京大学の使命は普遍性の高い真理の探求と優れた人材の育成であることは言うまでもありません。しかし、周知のように、地球環境問題、食糧問題、少子高齢化社会のように解決を求めている課題が山積しています。一国の国際的競争力を決定する重要な因子の一つとなっている「知価の国際的優位性」をいかに確保するかが課題となっています。キャッチアップ時代を終えた我が国には、地球社会の今後についていかなる国際的ビジョンが提示できるかが課題となっています。科学技術が社会の構成要素として浸透している現在、これらの課題への積極的対応が大学にも求められています。



第一回総長主催パーティーでの西尾理事

そして、こうした状況に関連して、各国の大学が研究成果や教育成果を国際的に競い合う時代が到来しつつあり、学生を含む優秀な人材の国際的「争奪」が始まろうとしています。

このように、近年、東京大学に対する要請が多岐多様になっており、こうした要請に応えるためには、その活動を支える財源も多様かつ豊富にする必要があります。無論、運営費交付金や競争的資金はこれらの活動を支えるための重要な財源です。しかし、上述したように、啓行活動を通じて得られる基金は本学に対する社会の評価結果であり、この意味からも重要な財源の一つとする必要があると思います。

最後に東京大学が必要とする基金額についての私なりの目安を示しておきたいと思います。

東京大学には、4000人の教員がいます。最近の研究は萌芽研究といえども経費がかかるようになっており、運営費交付金のみでは対応できなくなっています。そこで、理系文系平均して一教員に年間25万円を配分すると、10億円が必要となります。また、博士課程学生に年間100万円の奨学金を準備するとしますと、6000人の博士課程学生の1/3を支給対象とすると20億円が必要となります。さらに、東京大学は、床面積150万平米の教育研究施設を保有しており、30年で改修、50年で改築するとして、1/3を運用益で賄うとすれば年間平均して30億円の施設整備費が必要となります。以上のみを合計しても年間60億円の運用益(ハーバード大学の運用益の1.5%程度)が必要となり、6%の利率としても1000億円程度の基金が必要となると考えています。

最後の数字でご説明いただいた部分など、とても分かりやすく、さすが財務担当理事!とってしまったのは私だけでしょうか。

東大基金としては、今年度末に130億円の規模まで積み上げることを目標として一生懸命活動しておりますが、130億円を丸々運用したとしても、必要な分野全てに振り分けられるほどの額にはまだまだ達しません。辛抱強く、基金を育て上げるという意識を持って活動してゆき、みなさまにも末永く支援していただけるような東大基金でありたいな、と思います。

また、8月の休刊を挟み、9月からはいよいよ130億へ向けて、今年度後半戦が始まります。次回からも、1ページ拡大版での連載を続けてゆきたいと思いますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします!(鈴木)

基金最新情報

4,833件 9,267,755,301円

(内教職員 1,185件)

(7月18日現在申込)

教職員参加率 16.1%

連絡先: 渉外本部 鈴木
電話: 内線21247(外線03-5841-1247)
HP: <http://utf.u-tokyo.ac.jp/index.html>

※「東京大学トップページ」上で「東京大学基金」をクリック

■ 検見川緑地植物実験所「観蓮会」結果報告

7月14日(土)、検見川緑地植物実験所で行われました、「観蓮会」にコミュニケーションセンターも出店してまいりました。今年で3回目の出店です!!
あいにくの雨でしたが、たくさんのお客様にUTCセンターにもお立ち寄り頂きました。
また、雨に濡れる蓮の花は、格別な美しさでした。

<売上げベスト5>

1位	蓮花オードパルファム
2位	蓮花あぶらとり紙
3位	御酒
4位	光触媒シート
5位	御酒ミニボトル



「蓮香」オードパルファム
販売価格：2,100円(税込)

■ 蓮の生花が本郷キャンパスでも見られます!

「花蓮～歴史と夢～」

創立130周年記念事業の一環として、安田講堂前にて緑地植物実験所で栽培されている蓮の花が130鉢展示されています。めったに見られない蓮の花、この機会に是非ご覧になって下さい。コミュニケーションセンターにも分けて頂きましたので併せてご覧下さい。

期間：7月21日(土)～8月10日(金)



●7月31日(火)10:00～11:00

蓮の解説と、緑地植物実験所で作った「蓮の葉茶」の試飲会が行われます。(雨天中止・お茶が無くなり次第終了です!)

(担当：コミュニケーションセンター 吉岡)



東京大学コミュニケーションセンター
The University of Tokyo
Communication Center

The University of Tokyo

OPEN：月曜～土曜 10：30～18：30
電話：03-5841-1039
<http://www.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp>



科学技術振興調整費新興分野人材育成 科学技術インタープリター養成プログラム

廣野喜幸

総合文化研究科 准教授

科学技術インタープリター養成プログラム担当

金魚を飼うな、水を飼え

—科学技術インタープリターへのささやかな願い—

我が家の腕白坊主はお風呂が大嫌いだった。あまりに泣きじゃくるのでいささか心配になり相談してみたところ、専門家曰く「子どもは本来みんなきれい好きですから、心配なさらずとも大丈夫ですよ」。確かに、湯船で遊びまくり、なかなか出ようとしなくなるまでにさして時間はかからなかった。ふと、教育実習で受けた指導を思いだした。「生徒はみんな自然のことを知りたがっているのだから、その芽を育てて下さい」。

子どもたちであれ、成人の一般市民であれ、人々はみんな自然のことを知りたがっている。科学者たちはみんな自分たちの研究成果を伝えたいがっている。にもかかわらず、科学技術コミュニケーションは円滑にっていない。科学リテラシーも向上していない。それは伝え方が悪いからだ。楽しみながら、自然について、定理や法則がするすると頭にはどうすればよいか。その手法の開発と、うまく伝えることのできる人材の育成が必要である。——科学技術コミュニケーションをめぐる昨今の議論は、かような発想の下で、「技術論」を中心にめぐっているように感じられる。

内閣府「科学技術と社会に関する世論調査」によると、「あなたは、機会があれば、科学者や技術者の話を聞いてみたいと思うか」という質問に「聞いてみたいと思う」人は55.9% (1995年2月) → 57.0% (1998年10月) → 50.7% (2004年2月)、「聞いてみたいと思わない」者は42.7% (1995年2月) → 40.7% (1998年10月) → 47.2% (2004年2月)と推移している。ひょっとしたら、人々は自然のことなど知りたがっていないのではないか。

件の腕白坊主がお祭りで金魚を釣ってきた。あわてて飼育法を読み漁ったところ、「金魚を飼おうと思わず、水を飼うと思いなさい、水が適切ならば金魚は自ずから育つ」とあった。なるほど。科学技術インタープリターを育てるというよりは、科学技術インタープリターが自ずから育つ場を育まなければならないのだなと自戒した。もとより技術論はたいへん重要だろう。だが、不適切な前提の上に組み立てられた技術は効果を発揮できないだろう。科学技術コミュニケーションが自ずと活発になる場とは何か、そもそも科学技術コミュニケーションとは何か。こうした深みの問いに密着しつつ、果敢に実践に取り組む科学技術インタープリターが一人でも多く生まれることが私のささやかな願いである。

★科学技術インタープリター養成プログラム

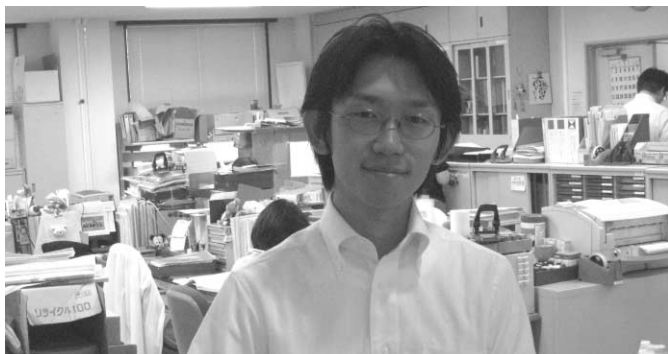
URL:<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/STITP/>

ワタシのオシゴト / 第18回

Rings around the UT

農学系教務課大学院学生担当
寺瀬竜二さん

二ホンの未来、おまかせください！



カウンター業務に邁進しております

人事部職員課から農学生命科学研究科大学院学生担当に配属されて、はや半年が過ぎました。仕事が変わった当時はちょうど受験シーズン到来で、仕事に追われる日々が続いておりましたが、今はすこし落ち着いているところです。この大学院学生担当は、大学院学生サービスを主に担当し、いわゆる窓口業務を持っておりますが、それ以外にも様々な仕事を抱えています。そのため、夏休みも大学院入試でほぼ無いとのこと…。頑張るぞ！と、そんな中、先生・学生と話をする機会や研究にふれる機会があり、大学に入って良かったと思える貴重な体験をさせていただいております。最近では、環境問題を始め、食の安全、バイオ燃料、FTAなど本当に農学の分野が脚光を浴びて、新聞を賑わせていますね。その背景にある基礎学問の膨大な集積に思いをはせ、昼休みにソフトボールの練習をしつつ、少しでも日本の未来の役に立てばと思う今日この頃です(笑)。

出身地：千葉県
自分の性格：
マイペース
血液型：O型

次回執筆者のご指名：
和田あきのさん
次回執筆者との関係：
同期です。
一言紹介：
癒し系ですね。



昼休みに……。ホームランを予告してる図



第20回

～広報センターより～

ご案内編

広報センターのご案内

広報センターは、1995(平成7)年9月にオープンした広報施設です。学内・学外を問わず、どなたでもご来館いただけます。今回は、ご利用あんない！！

お困りのとき、広報センターへどうぞ。

- ☆構内地図が欲しい
- ☆銅像や石碑の位置を知りたい
- ☆学食やレストランは？
- ☆東大グッズをみたいけど…
- ☆大学案内が欲しい
- ☆学部の講義要項を知りたい
- ☆東京大学へ入学したい
- ☆学内広報や淡青を読みたい
- ☆大学案内DVDが観たい
- ☆東京大学の歴史を調べたい
- ☆過去の学生数・就職状況・学生生活実態調査のこと
- ☆入試問題の実物に触れたい などなど…

場所：本郷キャンパス

龍岡門(たつおかもん) 横

開館日：月曜日～金曜日(祝日を除く)

開館時間：10時00分～16時30分

その他：夏季および年末年始の休館があります。

【建物は、1階と2階に分かれています】

1階

- * 構内地図や資料の配布を行っています。
- * 構内の銅像、史跡、石碑の位置をお教えします。
- * 大学案内DVDやVTRなどの視聴ができます。
- * インターネットで東京大学HPを確認できます。
- * 東京大学出版会の出版物の展示をしています。

2階 各局等の資料を展示し、閲覧室になっています。

(2階の資料は閲覧のみ)

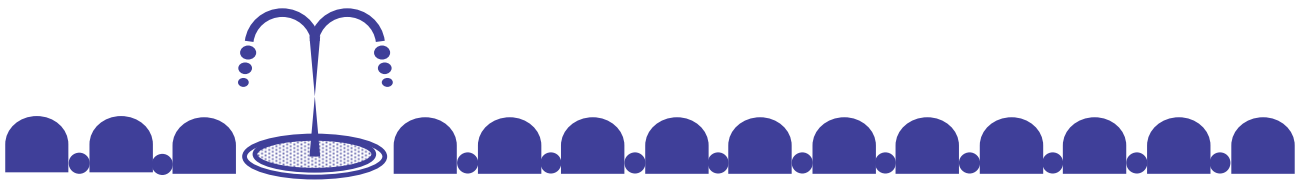
- * 東京大学概要。
- * 大学院・学部・研究所・全学センターの概要。
- * 学部便覧、大学院便覧、講義要項。
- * 大学入試問題実物、大学院募集要項。
- * 東京大学現状と課題(白書)。
- * 東京大学百年史、学内広報バックナンバー。
- * 構内の発掘調査報告書。 -他-

～詳しくは、広報センターのホームページをご覧ください～
「東京大学HP」→「広報・情報公開」→「広報センター」
<http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/public02.j.html>

え～、昨年7月より続けてまいりました「龍岡門横丁噺」ですが、今回をもちましてお休みさせていただくことになりました。何とか20回。今までお付き合いくださいました皆さま、本当にありがとうございました。どうぞこれをご縁に、広報センターにもぜひ足を運びくださるようお願い申し上げます。

最後になりましたが、全国のキャンパスで頑張っている皆様のご健康とご活躍をお祈りしております。

文・細谷恵子 ～仲入り～



平成19年度初心者水泳講習会を終えて

今年度も本部学生支援グループ体育チームからの依頼で、6月29日研修室での事前説明会を実施後、御殿下記念館プールで、7月4、5、6、11、12、13日の6日間行いました。

例年は留学生の方がほとんどですが、今回は日本人の方も5名参加され驚きました。なぜかと申しますと、日本人の方は子供の頃にスイミングスクール等で水泳に親しむためか、最近では初心者水泳講習会にはほとんど参加されないからです。この講習会は、全く泳げないと言うより、何かの理由で水に入ることがない方から息継ぎが出来ない方までが対象で、6日間参加すればクロールで25mを呼吸しながら泳ぐことが出来るというのが目標です。しかし、皆さん自ら泳ぎたいという意欲のある生徒さんなので、指導員が終了時間で終わりたくてもなかなか止めさせてもらえないこともありました。なお、日本語で説明している関係上、指導内容の理解度に差があるためか、生徒さんの中には思うように学んでもらえない場合があり、指導者側の課題になっています。それでも、中国の山で育てて今まで水に入ることがないが、この機会に若干泳げるようになったととても喜んで頂けて指導員としても非常にうれしい瞬間を味わいました。しかし、最終日の記念撮影に生徒さん全員に参加していただけなかったのが少し残念です。

今年度も東京大学水泳同好会の小林さん、高橋さん、関矢さん、西口さん、坂西さんにも指導を頂き、本部学生支援グループ体育チームの方や御殿下記念館の方にも助けられ、無事に初心者水泳講習会を終えることが出来ましたことをお礼申し上げます。有り難う御座いました。
(東大水泳同好会 藪田正)



講習会参加者と指導員（後列）

東大OB明石顕選手世界陸上大阪大会に出場

本学陸上部出身の明石顕選手（総合警備保障）が世界陸上大阪大会の50km競歩に出場します。明石選手は本学入学後競歩を始めて頭角を現し、卒業後も競歩を続け、前回の世界陸上ヘルシンキ大会の日本代表として50km競歩に出場し、15位の結果を残しました。

今年は大阪で世界陸上がありますが、明石選手はその選考会を勝ち抜いて今回も代表に選ばれました。50km競歩は9月1日（土）朝7時から大阪長居公園の周回コースで行われます。酷暑でのサバイバルレースが予想されますが、明石選手の得意とする粘りのレースに持ち込むことが期待されます。スタートとゴール以外は公園内でのレースですから入場料は要りませんので、夏休みで関西にいる方など、どうぞ皆様応援をお願いします。
(陸上部監督 八田秀雄)



ヘルシンキ大会での明石選手（ゼッケンNo.515）

INFORMATION

シンポジウム・講演会

シンポジウム・講演会

医科学研究所

医科学研究所公開セミナー「ラブラボ」 ～感染症の研究ってなんだろう？～ 開催のお知らせ

医科学研究所公開セミナー「ラブラボ」を下記の要領にて開催いたします。

本セミナーは、文部科学省科学技術振興調整費重要課題解決型研究「新興・再興感染症制圧のための共同戦略」（代表：山本雅・医科学研究所教授）のアウトリーチ活動で、研究者が感染症制圧を目指してどのような研究をしているのかを、主に高校生、大学生の皆さんを対象にお話します。エイズ、ピロリなどなど、感染症は私達のごく身近にあるものです。感染症と私達との関係、安心・安全な社会の形成について考える機会としていただければ幸いです。ぜひ、ご参加下さい。

日時：8月8日（水）13:00～15:30

場所：医科学研究所講堂

対象：一般（主に高校生および大学生）

参加費：無料

詳細：

<http://www.ims.u-tokyo.ac.jp/imsut/jp/events/others/806.pdf>

問い合わせ先：医科学研究所・所長企画室内
公開セミナー事務局（内線75254）
TEL：03-5449-5254
E-mail：office@ims.u-tokyo.ac.jp

プログラム：

13:00～13:15

「開会挨拶と医科研紹介」 清木元治（所長）

13:15～13:45

「ミクロの世界で細菌の感染を見る」

笹川千尋（細菌感染分野教授）

13:45～14:15

「エイズワクチンができたらうけますか？」

俣野哲朗（感染症国際研究センター 微生物学分野教授）

14:15～14:30 コーヒーブレイク

14:30～15:00

「生体最前線での免疫制御—お腹の免疫の摩訶不思議—」

国澤純（炎症免疫学分野助教）

15:00～15:30

「感染モデル動物としての霊長類」

服部正策（奄美病害動物研究施設准教授）

シンポジウム・講演会

社会科学研究所

創立130周年記念事業

中日民法法研究会第6回大会・第21回社研 シンポジウム 「中国物権法を考える」

2007年3月に採択された中国の物権法は、社会主義市場経済体制に法的基盤を提供するものとして内外から大きな注目を集めています。全国人民代表大会常務委員会の委託を受け、物権法の最初の草案を起草したのは、梁慧星教授を中心とする中国社会科学院法学研究所民法室のグループであり、彼らの作成した草案は、中国の市場経済化を促進するものとして、激しい論争を引き起こしました。

今回、社会科学研究所は現代中国研究拠点プロジェクトの一環として、中国社会科学院法学研究所民法室が主宰する中日民法法研究会、および大学院法学政治学研究所と共同で、中国物権法をテーマとするシンポジウムを開催いたします。草案起草担当者による報告を中心として、物権法の採択へ至る問題点の検討を踏まえ、成立した物権法の意義とそこに示された課題を解き明かします。

日時：8月31日（金） 13:00～18:00

場所：本郷キャンパス山上会館大会議室

参加申込受付：先着50名（参加費無料）

懇親会費：一般 5,000円 学生 3,000円

申込み先：bukkensympo@iss.u-tokyo.ac.jp

（氏名、住所、職業、所属、懇親会への参加の有無を明記してください）

・プログラム（敬称略）

13:00 開会

第1部

13:10 基調報告①

梁慧星

13:40 基調報告②

星野英一

14:00 総則編

孫憲忠

14:20 コメント

加藤雅信

14:30 休憩

第2部

14:45 所有権編 渠涛、陳華彬
 15:05 コメント 大村敦志
 15:15 用益物権編 陳甦
 15:35 コメント 原田純孝
 15:45 担保物権編 鄒海林
 16:05 コメント 近江幸治
 16:15 占有編 張広興
 16:35 コメント 松岡久和
 16:45 休憩

第3部

17:00 総合コメント 北川善太郎
 17:20 質疑
 18:00 閉会

19:00 懇親会

主催：中日民商法研究会／社会科学研究所・大学院法学政治学研究科

企画：社会科学研究所現代中国研究拠点

後援：財団法人社会科学国際交流江草基金
 社団法人商事法務研究会

協力：社会科学研究所地域主義比較プロジェクト
 (CREP)

シンポジウム・講演会

生命科学研究ネットワーク

**生命科学研究ネットワークシンポジウム2007
 開催のお知らせ**

東京大学生命科学研究ネットワーク（ネットワーク長：松本工学系研究科長）では、「生命科学研究ネットワークシンポジウム2007－生命科学・知の構造化－」を次のとおり開催いたします。

日時：9月15日（土）9:30～17:45

場所：講演 安田講堂
 ポスターセッション 安田講堂・工学部2号館

プログラム：

9:30～9:35 開会の挨拶
 工学系研究科長 松本 洋一郎 教授
 （生命科学研究ネットワーク長、シンポジウム実行委員長）

9:35～10:15 講演
 農学生命科学研究科 西澤 直子 教授
 「植物の鉄栄養遺伝子を活用した不良土壌耐性作物の作出」

10:15～10:55 講演
 分子細胞生物学研究所 宮島 篤 所長
 「組織幹細胞の分離・培養と医療への応用」

10:55～11:35 講演
 総合文化研究科 菅原 正 教授
 「原始細胞モデルへの構成的アプローチ」

11:35～15:00 ポスターセッション

15:10～15:40 総長講演
 小宮山 宏 総長「生命科学・知の構造化」

15:40～16:20 講演
 海洋研究所 西田 周平 教授
 「動物プランクトンの多様性と全海洋センサス」

16:20～17:00 講演
 薬学系研究科 三浦 正幸 教授
 「プログラム細胞死から見た細胞社会」

17:00～17:40 講演
 先端科学技術研究センター 菅 裕明 教授
 「遺伝暗号リプログラミングを駆使した新創薬技術R
 A P I Dシステムの創成」

17:40～17:45 閉会の挨拶
 工学系研究科 佐久間 一郎 教授
 （生命科学研究ネットワーク・シンポジウム実行委員会幹事）

17:45～19:30 懇親会（工学部2号館フォーラム）

今回のシンポジウムで、2回目の開催となります。盛況だった昨年に続き、今年もポスターセッションの場を設けました。昨年より時間帯も長く設定しましたので、多数の参加者をお待ちしております。

また、ポスター発表者、講演参加者をシンポジウムホームページで募集しております。

生命科学研究ネットワークシンポジウム2007
 ホームページ
<http://www.seimeikagaku.org/index.html>

生命科学研究ネットワークホームページ
<http://www.adm.u-tokyo.ac.jp/res/res5/kenkyu-nw-top.html>

THE UNIVERSITY OF TOKYO
東京大学
生命科学研究ネットワーク
シンポジウム2007

「生命科学・知の構造化」

Biodiversity CELL MOLECULE DNA Ecosystem

開催日
 平成19年9月15日(土) 9:30~17:45

開催場所
 東京大学 安田講堂

主催
 東京大学生命科学研究ネットワーク

協賛
 東京大学 工学部2号館

プログラム

9:30~10:15 開会式(招待講演) 2007 藤子 教授
 10:15~10:55 生命科学の発展と未来への展望 藤子 教授
 10:55~11:35 生命科学の発展と未来への展望 藤子 教授
 11:35~12:00 昼食
 12:00~12:30 講演(招待講演) 三浦 正幸 教授
 12:30~13:00 講演(招待講演) 三浦 正幸 教授
 13:00~13:30 講演(招待講演) 三浦 正幸 教授
 13:30~14:00 講演(招待講演) 三浦 正幸 教授
 14:00~14:30 講演(招待講演) 三浦 正幸 教授
 14:30~15:00 講演(招待講演) 三浦 正幸 教授
 15:00~15:30 講演(招待講演) 三浦 正幸 教授
 15:30~16:00 講演(招待講演) 三浦 正幸 教授
 16:00~16:30 講演(招待講演) 三浦 正幸 教授
 16:30~17:00 講演(招待講演) 三浦 正幸 教授
 17:00~17:40 閉会式(招待講演) 三浦 正幸 教授

協賛
 工学部2号館 生命科学センター 工学部2号館

TEL 03-5941-7482 FAX 03-5941-8481
 E-mail: seimeikagaku@seimeikagaku.org

東京大学創立130周年記念事業 130

生命科学研究ネットワークシンポジウム2007ポスター



前回シンポジウムのポスターセッション (工学部2号館)

お知らせ

お知らせ

生産技術研究所

第5回 東京大学学生発明コンテスト

生産技術研究所では昨年に引き続き発明コンテストを行います。本学の学生であればどなたでも参加できますので、皆様ふるって応募してください。

募集主旨：知的生産活動により得られた新規アイデアを個人の内に秘めておくばかりでなく、新規性の権利を明確に主張できることが、これからの知財立国を支える研究者に要求されています。研究者としての第一歩を踏み出したばかりの柔軟な思考を持つ学生諸君に、そのような権利主張を行うトレーニングの機会を与えることを目的として発明コンテストを企画しました。このような権利主張の機会を通じて、現在は漠然としたイメージしか抱かれていないであろう、知的財産権の理解を深めていただくことを期待しています。

応募資格：本学の学生 (学部学生・大学院学生等)

応募期間：7月2日(月)～9月28日(金)
(必着)

※応募用紙は6月中旬から配布いたします。

日程：2007年11月 下旬
 書類審査終了 予備審査結果の通知
 2007年12月25日(火)
 本審査 プレゼンテーション
 2008年1月 初旬
 審査結果の通知
 2008年1月 下旬
 表彰式

発明内容：発明の分野や内容、実施の度合は問いません。但し、「特許法上の発明」(自然法則を利用したアイデアで、産業上利用できるもの)に該当しない場合は審査対象にならない可能性があります。

提出書類：応募用紙表紙(様式A)…2部
 発明説明書
 (様式B、A4版タテ記述自由形式)…2部
 発明確認シート(様式C)…2部

応募用紙の様式A、Bの内容を含む電子媒体・・・1部

※応募用紙は、以下のホームページからダウンロードできます。応募資格、賞金額、第1回から第4回までの本コンテストの詳細も参照することができます。

<http://hatsumei.iis.u-tokyo.ac.jp/>

審査：生産技術研究所（産学連携委員会）、産学連携本部、財団法人生産技術研究奨励会（TLO）、弁理士の関係者で行う予定

※審査においては、特許性よりもアイデアを重視する予定です。

表彰：発明大賞、産学連携本部長賞、生産技術研究所長賞他

※各賞に賞状、賞金、記念品が授与される他、優秀な発明に対しては、発明者が希望する場合、特許出願などのアドバイスをを行います。

その他：応募する際には事前に、「応募にあたってのご注意」をご確認ください。

※一人で複数の発明を応募しても構いませんが、発明ごとに別々に応募してください。

主催：生産技術研究所、産学連携本部、財団法人生産技術研究奨励会（TLO）

問い合わせ先・応募先：

〒153-8505

東京都目黒区駒場4-6-1

東京大学生産技術研究所内

財団法人生産技術研究奨励会

発明コンテスト係

電話: 03-5452-6094

Fax: 03-5452-6096

e-mail: fpistol1@iis.u-tokyo.ac.jp

お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

「**教養学部報**」第504（7月4日）号の発行
——教員による、学生のための学内新聞——

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、学際交流棟ロビー、15号館ロビー、図書館ロビー、生協書籍部、保健センター駒場支所で無料配布しています。バックナンバーもあります。

第504号の内容は以下のとおりとなっていますので、ぜひご覧ください。

丹野義彦・石垣琢磨・平石界：駒場の「よろず相談所」を知っていますか？

寺尾美子：東京大学ではセクシュアル・ハラスメント防止に取り組んでいます～気になることがあればハラスメント相談所へ～

岡本拓司：駒場 I キャンパスに残る「明治」

鈴木 建：太陽風——太古の地球から宇宙天気予報まで——

桜井隆史：身体運動教育のカリキュラム改革（3）

呼吸循環と健康、自分にあった至適運動強度を知る

〈本郷各学部案内〉

大日方隆：実証主義の経済学と数学的素養

〈本の棚〉

岡山 裕：三谷博著『明治維新を考える』日本史嫌いに付ける薬？

田尻芳樹：スティーヴン・グリーンブラット著／

河合祥一郎訳『シェイクスピアの驚異の成功物語』

〈時に沿って〉

太田邦史：Back to the future

山田貴富：過去と未来

成川 礼：駒場の変遷の中で

梶田 真：昔、学生だったところで教員をすることへの戸惑い

お知らせ

本部広報グループ

広報センター 夏季臨時休館のお知らせ

本学広報センター（龍岡門脇）は下記のとおり、臨時休館いたします。

8月13日（月）～17日（金）

■広報センターHP

http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/public02_j.html

【東京大学HPトップ】→右列の【広報・情報公開】をクリック→【広報センター】をクリック

内田 久雄 名誉教授

内田久雄先生は、ご療養中のところ、平成19年7月2日、肺炎のため逝去なさいました。享年81歳でした。



先生は大正15年2月に東京市麻布区（現目黒区）にお生まれになり、昭和22年9月に東京帝国大学理学部化学科をご卒業、国立予防衛生研究所第二細菌部勤務を経て、昭和29年6月に東京大学伝染病研究所（現医科学研究所）助手に転任なさいました。昭和32年から36年にかけて、米国カリフォルニア大学パークレー校および西ドイツへ留学。この間、昭和33年5月には理学博士（東京大学）の学位を取得していらっしゃいます。帰国後は、昭和38年3月伝染病研究所助教授に、昭和45年同研究所教授に昇任し、昭和61年3月に停年で東京大学を退職なさるまで同研究所生物物理化学研究部長として活躍なさいました。さらに、昭和61年には帝京大学へ着任、平成元年より同8年3月に停年を迎えるまで理工学部バイオサイエンス学科長としての重責をお果たしになりました。

戦後米国・英国で交流しつつあった分子生物学にいち早く興味を持ち、留学中その息吹に触れた先生は、昭和36年の帰国後、大腸菌やバクテリオファージを用いて、オルガネラの形態形成、DNA複製、RNA転写、タンパク質合成などの基本的な細胞機能の分子遺伝学的研究を推進する傍ら、欧米に後れをとり研究設備も乏しかった我が国に分子生物学を根付かせようとひとかたならぬ努力をなさいました。当時、我が国で分子生物学を志している人々に定位置といえる居場所がなく、研究発表をする学会

もまた同じような状況でした。そのような状況を打開するため先生が企画なさったのが、昭和46年より毎年開催された分子生物学シンポジウムです。多くの若い人々を啓発し、我が国の分子生物学の担い手に育てたこのシンポジウムは、昭和53年に日本分子生物学会へと発展的に解消し、先生は第二代会長として昭和58年から二期4年をお務めになったのでした。

後進の育成に当たる一方で傾注なさったのが、研究倫理の確立です。昭和50年代初頭、分子生物学における大きな技術革新として遺伝子組換え技法が台頭してきましたが、その適切な運用にはガイドラインの早期制定が喫緊の課題だとお考えになり、昭和54年に総理大臣決定されることとなる「組換えDNA実験指針」の草案作成に尽力なさいました。昭和56年に医科学研究所に設置された我が国初の本格的な遺伝子組換えのための遺伝子解析実験施設では、初代施設長として本学における分子生物学興隆の基礎を築くこととなりました。広範な専門知識は科学技術政策にも活かされ、平成6年から平成12年まで、日本学会会議の会員として分子生物学研連、生物科学研連の委員長を歴任していらっしゃいます。

このような長年のご功績に対して、昭和63年に紫綬褒章、平成8年には旭日中綬章が贈られました。

「研究は楽しまなければいけないよ」が先生の口癖でした。実際、先生は興味深いことに誰よりも早く着目して地盤を固め軌道に乗せる、いわば開拓者の立場を楽しんでおられました。昨今の我が国に於ける分子生物学のめざましい興隆を見るにつけても、実に幸せな人生をお送りになったものと感嘆せずにはられません。もはや先生にお導きいただけなくなったことを思いますと哀悼の念止みがたく、ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(医科学研究所)

学内広報月刊化のお知らせ

2007年9月より、学内広報は月に1回のペースで発行されることになりました。
この月刊化にともない、記事の内容も以下のように変わる予定です。

- 特集
- 連載コラム
- 訃報
- 事務連絡(人事異動)
- 淡青評論
- NEWS全般
- INFORMATION全般

現状通り
掲載される
情報

これらの項目の他にも、「退職
教員の紹介」など、従来から掲
載されていた公的な情報は掲
載されます。

EVENT LISTは、今後、ホーム
ページ・ポータルサイトをご活用
ください。

ホームページ・ポータルサイトを
ご利用いただく情報

★EVENT LIST

今後、INFORMATION記事ご寄稿の際には、記事上の開催日・×切等が当該号配布日以降
であることをご確認のうえ、お送りください。また、即時性を要求されるINFORMATION記事に
関しましては、ホームページ・ポータルサイトをご活用ください。

2007年度後半の学内広報発行スケジュール

学内広報月刊化にともない、発行スケジュールは以下ようになります。寄稿の際に、ぜひ、ご参照ください。

号数	原稿締切日 (原則第1月曜日)	発行日	配付日
1363	9月 3日(月)	9月 14日(金)	9月 21日(金)
1364	10月 1日(月)	10月 15日(月)	10月 19日(金)
1365	10月 29日(月)	11月 9日(金)	11月 15日(木)
1366	学生生活実態調査特集号(予定)		
1367	12月 3日(月)	12月 14日(金)	12月 20日(木)
1368	1月 9日(水)	1月 24日(木)	1月 30日(水)
1369	2月 4日(月)	2月 18日(月)	2月 22日(金)
1370	セクシュアル・ハラスメント アンケート結果特集号(予定)		
1371	3月 3日(月)	3月 14日(金)	3月 21日(金)

※1月は連休があるため、締切日を第2水曜日とします。

学内広報にご寄稿の際は、以下のURLにある「記事提出要領」をご参照ください。
http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou_j.html
 【東京大学ホームページ】→【右下の学内広報アイコンをクリック】

問い合わせ先・原稿提出先:本部広報グループ 広報企画チーム
 TEL:03-3811-3393 内線22031 E-mail:kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

= 特集テーマ&執筆部署募集告知 = 特集の記事を執筆してみませんか？

学内広報では巻頭特集の記事テーマとその執筆部署を募集しています。学内への周知を図るためのツールとして特集はとても効果的です。皆さんの部署でも、ぜひ特集の記事を執筆してみませんか？

1. 制作方法

① テーマの選定

全学の教職員を読者対象とするテーマを選定することになっています。
まずは一度、本部広報グループに気軽にご相談ください。特集に馴染まないテーマでない限り、対応します。
(締切日の2週間前位までに一度ご相談ください)

② 内容・構成の決定

執筆部署と学内広報編集スタッフ（以下、編集スタッフ）が打ち合わせをしてページの内容を決めていきます。
見開き2ページを1単位とします。内容が盛りだくさんの場合は4ページ、または6ページで構成することもあります。

③ 原稿の執筆

決定した構成に合わせて執筆部署に原稿を書いていただきます。
字数等は編集スタッフが提示します。原稿はWordファイルでご制作下さい。

④ ビジュアル要素の提供

特集に盛り込む写真・図・イラストを執筆部署から提供していただきます。
手持ちの写真がない場合は編集スタッフが撮影にうかがいます。

⑤ デザイン

お書きいただいた原稿、ご提供いただいた写真・図等を素材にして、編集スタッフがページデザインを作ります。
もちろん、執筆部署でデザインを作っていただいてもかまいません。

⑥ 校正

デザインしたページイメージをお送りしますので、主に文字校正を行なっていただきます。

⑦ 完成

刷り上がった学内広報は、執筆部署に多めに配布します。

2. 締切日

こちらから期日を申しますので、ご協力をお願いします。
学内広報×切日（原則的に第1月曜日）の**前週の週末**を特集原稿×切日とします。

3. 問い合わせ先・原稿提出先

本部広報グループ 広報企画チーム TEL：03-3811-3393 内線22031 E-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp



EVENT LIST

行事名	日時	場所	連絡先・HP等
神経機能セミナー 「Mechanisms of axon degeneration and axon regeneration」	7月31日(火) 17:00~18:00	医学系研究科教育研究棟 2階0202号室(第2セミナー室)	医学系研究科神経機能解明ユニット 河崎洋志 TEL:03-5841-3616 E-mail:kawasaki@m.u-tokyo.ac.jp
第10回 土木・建築工学における確率・統計理論の応用に関する国際会議	7月31日~8月3日 (開催時間等はHP参照のこと)	柏キャンパス内 (HPのプログラム参照のこと)	ICASP10 Secretariat Prof. Tsuyoshi Takada E-mail: icasp10@load.arch.t.u-tokyo.ac.jp URL:http://www.ics-inc.co.jp/ICASP10/index.html
地震研究所 一般公開・公開講義 ※1361号参照	8月2日(木) 10:00~16:00 (研究展示) 13:30~15:40 (公開講義)	地震研究所(研究展示) 弥生講堂(公開講義)	地震研究所アウトリーチ推進室 TEL:03-5841-5643 E-mail:openlec@eri.u-tokyo.ac.jp URL:http://www.eri.u-tokyo.ac.jp/KOHO/PANKO2007/
FSフォーラム 第10回 宇宙太陽発電システム(SPS)シンポジウム	8月2日(木)午後 3日(金)終日	柏キャンパス 新領域基盤棟2F大講義室	太陽発電衛星研究会、大学院新領域創成科学研究科 E-mail: komurasaki@k.u-tokyo.ac.jp URL: http://sps.kml.k.u-tokyo.ac.jp/
社会科学を語る夏のワークショップ 「〈ヨーロッパ〉のいまを読み解く」	8月2日(木) 3日(金)	経済学研究科棟 一番教室	社会科学研究所庶務分野 TEL:03-5841-4904 FAX:03-5841-4905 E-mail:summerws07@iss.u-tokyo.ac.jp
特別講演会 「東洋的な生命倫理は可能か」	8月4日(土) 18:00~19:00	鉄門記念講堂	生命・医療倫理人材養成ユニット URL:http://square.umin.ac.jp/CBEL/
医学研究所公開セミナー「ラブラボ」 ※15ページ参照	8月8日(水) 13:00~15:30	医学研究所講堂	医学研究所・所長企画室内 公開セミナー事務局 TEL: 03-5449-5254 E-mail: office@ims.u-tokyo.ac.jp
シンポジウム「リテラシー(基礎学力)を育む」	8月9日(木) 13:00~17:00	理学部1号館 小柴ホール	大学院教育学研究科附属学校教育高度化センター・ 基礎学力向上プロジェクト TEL:03-5841-1749 URL:http://www.p.u-tokyo.ac.jp/c-kodoka/kanken.html
創立130周年記念 中日民商法研究会第6回大会・ 第21回社研シンポジウム ※15ページ参照	8月31日(金) 13:00~18:00	山上会館大会講堂	主催: 中民商法研究会/ 社会科学研究所・大学院法政政治学研究所 申込み先E-mail: bukkensympo@iss.u-tokyo.ac.jp
東文研セミナー 「銃後の中国社会: 日中戦争下総動員と農村」	9月14日(金) 15:00~17:00	工学部8号館7階736号室	東洋文化研究所 URL:http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/
東文研セミナー 「中国銅銭の世界: 銭貨から経済史へ」	9月15日(土) 13:00~16:00	工学部8号館7階736号室	東洋文化研究所 URL:http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/
生命科学ネットワークシンポジウム2007 ※16ページ参照	9月15日(土) 9:30~17:45	安田講堂	URL:http://www.seimeikagaku.org/index.html
日独学生交流セミナー2007	9月1日・2日と 6日~20日まで	東京大学教養学部、 都内の新聞社、鎌倉など	幸田薫 E-mail:koda@boz.c.u-tokyo.ac.jp
行事名	開催期間	場所	連絡先・HP等
創立130周年記念事業特別展示 「遣丘と女神—メソポタミア原始農村の黎明」展	5月26日(土) ~9月2日(日) 月曜休館(月曜祝 日の場合は開館、 翌日休館) 10:00~17:00 (入館は16:30まで)	総合研究博物館 1階新館展示ホール	総合研究博物館 URL: http://www.um.u-tokyo.ac.jp/ (臨時休館の場合があるので、ホームページ確認のこと)
文化資源学公開講座 「市民社会再生—文化の有効性を探る—」	6月8日(金)~平 成20年1月11日(金) 全12回 18:40~20:20	本郷キャンパス 法文2号館2階1番大教室	大学院人文社会系研究科文化資源学研究室 URL:http://www.l.u-tokyo.ac.jp/CR-K/
第5回東京大学学生発明コンテスト ※17ページ参照	7月2日(月) ~9月28日(金)		財団法人生産技術研究奨励会 発明コンテスト係 TEL: 03-5452-6094 FAX: 03-5452-6096 E-mail: fpist101@iis.u-tokyo.ac.jp
常設展示「(新制) 東京大学総長著作展(2) —平野総長から佐々木総長まで—」 ※1361号参照	7月5日(木)~9月 26日(水)【7月26 日(木)、8月23日 (木)、9月9日(日) の休館日を除く】	総合図書館3階ロビー	附属図書館 URL:http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/koho/news/news/ fuzokuto_07_07_04.html
創立130周年記念事業「花蓮—歴史と夢—」 ※1361号参照	7月21日(土) ~8月10日(金)	安田講堂前広場(屋外展示)	
直島哲学キャンプ	8月6日~9日 (3泊4日)	香川県香川郡直島町	教養学部附属教養教育開発機構 教養教育社会連携(ベネッセコーポレーション) 寄付研究部門 E-mail: high-school@komed.c.u-tokyo.ac.jp TEL: 03-5465-8820, FAX:03-5465-8821
第107回(平成19年秋季) 東京大学公開講座	9月22日~10月20日 の各土曜日 13:30~	安田講堂	URL:http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/d04_01_01_j.html 本部広報グループ TEL:03-3815-8345

Contents

特集

02 UTフォーラム in ソウル

06 新役員の紹介

NEWS

一般ニュース

08 知のプロムナード小委員会
知のプロムナードデザインコンペ入選作品
決まる！
—たかがくベンチ>、されどくベンチ>—

部局ニュース

08 医科学研究所
創立130周年記念事業International Student
Forum2007開催される

09 大学院理学系研究科・理学部
留学生見学旅行

コラム

10 Crossroad～産学連携本部だより～vol.21

11 Step by Step 東大基金通信 第4回

12 コミュニケーションセンターだより No.38

12 インタープリターズ・バイブル Vol.8

13 Relay Column「ワタシのオシゴト」 第18回

13 龍岡門横丁噺 第20回

14 噴水 平成19年度初心者水泳講習会を終えて

東大OB明石顕選手世界陸上大阪大会
に出場

INFORMATION

シンポジウム・講演会

15 医科学研究所
医科学研究所公開セミナー「ラブラボ」
～感染症の研究ってなんだろう？～
開催のお知らせ

15 社会科学研究所
創立130周年記念事業 中日民商法研究会
第6回大会・第21回社研シンポジウム
「中国物権法を考える」

16 生命科学研究所
生命科学研究所ネットワークシンポジウム
2007開催のお知らせ

お知らせ

17 生産技術研究所
第5回 東京大学学生発明コンテスト

18 大学院総合文化研究科・教養学部
「教養学部報」第504(7月4日)号の発行
—教員による、学生のための学内新聞—

18 本部広報グループ
広報センター 夏季臨時休館のお知らせ

訃報

19 内田久雄 名誉教授

22 EVENT LIST

淡青評論

24 東京大学の美しき学問

◆ 表紙写真 ◆

小宮山総長とソウル大学校総長・高麗大学校総長
(2ページに関連記事)

編集後記

巷のメディアの中で【学内広報】に近いものは？ おそらく、企業の「社内報」などの「組織内に読者を想定したメディア」がもっとも近いと思います。ところが、それらと本誌には一点だけ大きな違いがあります。それは「読者＝執筆者」であること。本誌は東大の全教職員を読者とし、同時に全教職員が執筆者たりうるメディアなのです。表紙に記された「for communication across the UT」は伊達ではありません。巷のメディア全体からみれば、きわめて

ユニークであり、誇れるメディアなのではないでしょうか。そんな【学内広報】が9月から月刊化します。コミュニケーション・ニューズペーパーからコミュニケーション・マガジンへ……新たな可能性を模索する「月刊学内広報」を、これからもよろしく願いいたします。もちろん、その中身を作っていくのは読者であるあなた自身です。(し)



七徳堂鬼瓦

東京大学の美しき学問

一年ほど前に外山雄三指揮によるマーラーの交響曲5番を聞く機会があった。この曲は70分以上もかかる長い曲なので、これまで華々しいわりには途中で居眠りをしてしまったという記憶があった。けれども自分でも驚いたが、最後まで適度な緊張と興奮で聞き終えることができた。久しぶりの名演奏に感動した。人の心を癒し感動させる力を持つ音楽は本当にすばらしい。

音楽、より広く言えば「芸術」は疑問を挟む余地もなく「美しいもの」の一つだと思う。私はこの「美しいもの」のもう一つに「学問」があると

思っている。この学問を遂行する場の一つが大学である。しかしながら、昨今とりわけ法人化後はこんな呑気なことを言っていられなくなった。大学を取り巻く環境が大きく変わり、外部資金をいくら集めたとか、特許がいくつ出たといったことまで視野にいれなければいけなくなった。

ところで、音楽の演奏は指揮者によっても変わる。すばらしい演奏かどうかは、その場その場で聴衆の感性によって評価が下される。では、大学は何で評価されるのであろうか。どれだけ日本一の研究があるとか、特許の数とか論文掲載数といったことも現時点での大学を評価する指標であろう。しかし、それだけでは世界の中で尊敬され感動を与える「美しいもの」である学問を遂行する場たりえとは思えない。

では、そのような場としての大学に必要な原点はなんだろうか。理学研究者の一人として例をあげれば、小柴先生のニュートリノ研究は世界中に感動を与えたと確信する。このような物事の本質に迫る根源的研究(学問)をどれだけ輩出したかではなかろうか。この例に代表されるように、成果があがるまでに長い年月を必要とし、短期的な時間スケールで成果を評価する基準からいえば生き残れなかったであろう基礎研究を東京大学は大事にしてきた歴史がある。外部環境が複雑に変化する時には、ややもすれば現状対応型の舵取りになり勝ちである。現在、多くのことが移行過程にあるのだろうが、この様な時だからこそ長期的視野に立ち、感動を与える「学問」を大事にし、新たな種をまいて育てる懐の深い姿勢をいっそう鮮明に打ち出してほしい。

酒井 英行 (大学院理学系研究科・理学部)

(淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。)

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部広報グループを通じて行ってください。

No. 1362 2007年7月25日
東京大学広報委員会

〒113-8654
 東京都文京区本郷7丁目3番1号
 東京大学本部広報グループ
 TEL : 03-3811-3393
 e-mail : kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
<http://www.u-tokyo.ac.jp>